
 学 会 記 事

第7回新潟消化器病遺伝子・免疫研究会

日 時 平成12年10月20日 (金)
PM 6 : 00 ~ 8 : 10
会 場 新潟グランドホテル 3F
悠久の間

I. 一 般 演 題

1 マウス Adult life における肝 CD4 + NKT cell の供給源についての検討

亀山 仁史・川村 俊彦
内藤 哲也・坂内 誠 (新潟大学)
渡部 久実・安保 徹 (医動物)

【目的】 NKTcell の分化に対する胸腺の役割については未だに議論が分かれている。今回我々は, adult thymectomy (ATx) モデルを使用し, adult life における肝 CD4 + NKTcell の供給源について検討した。

【方法】 C57BL/6 マウス (8W) に対して thymectomy を施行した。ATx 後の NKTcell の動態を FACSscan を用いて解析した。さらに ATx 後に α Gal 刺激を行い同様の解析を行った。

【結果】 ATx 後も肝 CD4 + NKTcell は保たれていた。 α Gal 刺激後の CD4 + NKT 細胞の補給は胸腺 independent であった。

【結語】 adult life では, 肝 CD4 + NKTcell はその供給源として胸腺を必ずしも必要としない。neonatal stage に, 胸腺の存在下で, CD4 + NKTcell (or progenitor) が, 胸腺外の組織に一定期間存在することが, 肝 CD4 + NKTcell の供給に重要であると考えられた。

2 MAIDS 腸炎モデルにおける腸炎発症機序の解析

佐々木俊哉・鈴木 健司
摺木 陽久・馬場 靖幸
渡辺 史郎・河内 裕介
米山 博之・長谷川勝彦 (新潟大学)
大塚 和朗・朝倉 均 (第三内科)
河内 裕・清水不二雄 (同 附属腎研究施設
分子病態学分野)

我々はこれまで, レトロウイルス感染マウスの脾臓細胞を移入したヌードマウスに, 炎症性腸疾患類似の腸炎が生じることを報告してきた。今回はまず, この大腸におけるサイトカイン (IFN- γ と IL-10) と浸潤細胞との関係について, 免疫蛍光抗体法を用いて検討した。CD4 + T 細胞に関しては IL-10陽性細胞が多い傾向を認め, Mac-1 + 細胞に関しては IFN- γ 陽性細胞が多い傾向を認めた。次に, 腸炎発症までの経時的解析も行った。細胞浸潤は移入後2週目から大腸粘膜内に見られ, 5週目にはびらん形成を認めた。免疫蛍光抗体法による解析では, 浸潤細胞は主に CD4 + 細胞および Mac-1 + 細胞であり, これらの細胞は, 炎症初期から IFN- γ , IL-10を発現していたが, 炎症の進展とともに IFN- γ の発現が増強する傾向にあった。以上より, 我々の実験性腸炎の大腸において, Mac-1 + 細胞の産生する IFN- γ が病態を形成し, CD4 + T 細胞と Mac-1 + 細胞の産生する IL-10が病態を修飾している可能性が示唆された。

3 放射線感受性遺伝子座の解析

児玉 泰光・斉藤 有子 (新潟大学)
落合 幸江・木南 凌 (第一生化)
若菜 茂晴 (実験動物中央研)
丹羽 太貴 (京都大学放射線
生物研究センター)

マウスに γ 線を照射すると胸腺リンパ腫が誘発される。そのがんになりやすさは系統間で異なり, BALB/c 系統は感受性を, MSM 系統は抵抗性を示す。私達は, MSM 系統に戻し交配したマウス (N2M) に γ 線を照射し, 連鎖解析を用いて, がんになりやすさを決定する遺伝子座の解析を行ってきた。その結果, N2M では, 2番, 4番染色体

上に, BALB/c 系統に由来するがん感受性遺伝子座の存在を, また5番染色体上には BALB/c 系統に由来する, がん抵抗性遺伝子座の存在がそれぞれ示唆された. この可能性を確認するため, 各遺伝子座領域のコンジェニックマウスを作製し, 再度同様に照射実験を行ったところ, 4番染色体 (D4 Mit12/ 338) に関する解析において, C/M パターンのマウス平均生存期間は 246 ± 10 日, M/M パターンのマウス平均生存期間は 275 ± 7 日となり, 両者間に有意な差 ($\chi^2 = 8.89$, $p = 0.0029$) が認められ, この遺伝子座に BALB/C 系統に由来するがん感受性遺伝子の存在が確認された. コンジェニックマウスを用いた2番染色体, 5番染色体の, がん感受性・抵抗性遺伝子座については, 現在解析検討中である.

4 Gastric carcinoma with lymphoid stroma (GCLS) の検討

橋立 英樹・渡辺 英伸 (新潟大学)
味岡 洋一・西倉 健 (第一病理)
安保 徹・渡部 久実
宮川 亮子・内藤 哲也 (同 医動物)
菅原 聡・良田 裕平 (同 第三内科)
相場 恒男

【目的】胃癌において, 癌巣周囲に強いリンパ球浸潤を伴うタイプの癌があり, (Gastric) Adenocarcinoma with lymphoid stroma (GCLS) と呼ばれ, 通常の胃癌に対して予後が良好であり, さらに Epstein-Barr virus (EBV) が関与することが知られている.

【目的】GCLS の浸潤リンパ球の特性および EBV 感染との関係を調べる.

【材料・方法】GCLS 外科切除固定材料28症例について, 免疫組織化学にて GCLS の粘液形質を, In situ hybridization 法にて EBV RNA を, 新鮮材料が入手可能であった5例については Flowcytometry にて腫瘍浸潤リンパ球をそれぞれ分析した.

【結果】1) GCLS ではほとんどの症例 (93%) で EBER-1 が陽性であった. 2) GCLS は多くの症例 (89%) で胃型粘液形質を示した. 3) GCLS の TIL は末梢血に比べて NK cell が少な

く, CD 8 + T cell が多い傾向があった.

II. 特 別 講 演

「免疫系の標的細胞傷害機序」

順天堂大学医学部免疫学

八木田 秀 雄

第61回新潟癌治療研究会

日 時 平成13年 7 月28日 (土)
午後 1 時40分 ~ 5 時40分

会 場 新潟東映ホテル 1 F
白鳥の間

I. 一 般 演 題

1 遠隔転移をきたした頭頸部扁平上皮癌10例の臨床病理学的検討

長島 克弘・星名 秀行
高木 律男・永田 昌毅
藤田 一・宮本 猛
相馬 陽・関 雪絵 (新潟大学大学院
福西 雅史 (医歯学総合研究科
顎顔面口腔外科))

悪性腫瘍の転移は, 予後を左右する重要な因子である. 特に遠隔転移を生じた場合には, 患者の生命予後は絶望的となることが多い. このような遠隔転移の可能性を未然に予測し対応することができれば, 予後の向上が期待できる. そこで, 口腔癌の原発巣および頸部リンパ節が制御されているにもかかわらず, 数か月後に遠隔転移が確認された症例を対象に, 臨床病理学的に検討を加えた. 対象症例: CT の日常稼働, CDDP 多剤化学療法を導入した 1984 年以降の頭頸部扁平上皮癌 193 例中の10例である. 検討項目: 原発部位, TNM